第12課　主の日

【暗唱聖句】

「このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。」第二ペテロ3:11

この世界はやがてすべてのものが滅び去っていくと聖書は語ります。だから、信心深い生活を送らなければならないと言います。信心深い生活とは、どのような生活のことを言うのでしょうか。新改訳聖書では聖い生き方と訳されています。神様を信じて生きるとは、聖い生活にほかなりません。また、信心と訳されている言葉には、礼拝を捧げるという意味が込められています。常に、主を仰ぎ、敬虔な思いをもって、主に礼拝を捧げることを通して、すべての終わりの備えとなっていくということです。確かにこの世のものはすべて滅び去るときが来ますが、その時新しい永遠の世界の扉は開かれるのです。つまり、その新しい世界に入る準備を、今からしっかりするようにと聖書は教えているということです。

【今週のテーマ】

最後の審判の日、神様の裁きの御座の前に立つときがきます。ペテロはこの事実を薄めることなく、警告しています。

【日曜日　権威の系統】

「愛する人たち、わたしたちはあなたがたに二度目の手紙を書いていますが、それはこれらの手紙によってあなたがたの記憶を呼び起こして純真な心を奮い立たせたいからです。聖なる預言者たちがかつて語った言葉と、あなたがたの使徒たちが伝えた、主であり救い主である方の掟を思い出してもらうためです」第二ペテロ3：1，2

ペテロは3章において、なぜ自分がこの手紙を書いたのかについて説明しています。それは、読者の「記憶を呼び起こして純真な心を奮い立たせたいから」でした。呼び起こしたい記憶とは2つあり、一つは「聖なる預言者たちがかつて語った言葉」であり、もう一つは「使徒たちが伝えた主の掟」についてです。この2つのことを思い起こすによって、心を震え立たせたいというわけです。

預言者たちが語った言葉と使徒たちが語った言葉を連続して書くことによって、それは同じ権威があること、つまりどちらも神様の霊感を受けて書かれた神様の言葉であることを示しています。神様の言葉を聞くことができきるというのは何と驚くべきことでしょうか。何と大いなる特権でしょうか。そう考えると心が震え立つような畏れと、喜びに満たされることでしょう。

しかし、このような神様の言葉を与えられているにも関わらず、このことをついつい忘れてしまいがちです。だから、ペテロはもう一度その記憶を呼び覚ましたかったのです。このことが最後の結論としてペテロが語ろうとしている重要なメッセージを聞く備えともなっていくからです。

【月曜日　あざける者たち】

「まず次のことを知っていなさい。終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけって、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」」第二ペテロ3：3，4

終わりの時には、主のご再臨に対して、この世界は未だかつて何も変わらなかったではないか。だからこれからも何も変わるはずかないといって、あざけるものたちが出てくるだろうと語っています。クリスチャンの希望に対する挑戦です。確かに、穏やかに晴れ渡った気持ちの良い天候の中、本当にこの世が滅亡し、天からキリストが戻って来るという想像を絶するような出来事が起こるのだろうかと思ってしまう瞬間があるかもしれません。そして反対者たちは聖書の終末を預言した預言者たちはもちろん、多くのクリスチャンたちもキリストの再臨を見ることなく亡くなっていったではないかと主張してくることでしょう。

しかし、ノアの大洪水が起き、一度この世界は滅びました。またこの日本においても阪神淡路大震災や東日本大震災で大勢の命が一瞬に奪われる悲惨な出来事は実際に起きています。「天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」という主張は正しくはありません。

ところで、ここで興味深いのは、このような主張をする人たちの特徴と偽りの自由を教えていた偽教師たちとの姿が似ていることです。異端を持ち込む偽教師の姿は次のように描かれています。

「特に、汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み、権威を侮る者たちを、そのように扱われるのです。彼らは、厚かましく、わがままで、栄光ある者たちをそしってはばかりません」第二ペテロ2:10

偽教師・・・・・「汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み」

あざける者・・・「欲望の赴くままに生活して」

両者とも肉の汚れた欲望に従って歩むという特徴があると指摘しています。肉の欲望のままに生活すると、徐々に主のご再臨に対する備えが疎かになってしまうことでしょう。

【火曜日　一日は千年のよう】

「3:8 愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。3:9 ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。3:10 主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます」第二ペテロ3:8～10

ペテロは最後にこのことだけは忘れてほしくないと考えていることを伝えます。それは「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のよう」だということです。主の再臨など待っても、待っても来ないではないかと主張する人達の意見に対して、主のもとでは一日が千年のように感じるかもしれない。しかし、そのように思っている矢先に主の日は来る、まるで千年は一日のように、それはあっという間にやってくると言っています。詩篇の記者も次のように語っています。

「千年といえども御目には、昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません」詩篇90:4

時間の感覚、あるいは時間の概念が神様と人間では違うということです。だから、感覚で神様のご計画が早いとか、あるいは遅いというべきではないのです。まだか、まだかと主のご再臨を待ち焦がれている人には千年のように長く感じるかもしれませんが、主のご再臨などないと思っている自分の欲望に従って生きている人にはあっという間にその時が訪れることでしょう。

人間的な視点からするとキリストのご再臨が遅れているかのように感じることがあっても、神様の視点からすれば全く遅れてはいません。ただ神様は一人も滅びないで皆が悔い改めることを願ってにんたいして再臨のときを遅くしておられるとペテロは言います。再臨が遅いと感じることがあるならば、そこに神様の人類に対する愛と忍耐を見るべきです。しかし、再臨が遅れているからといって、わたしたちがなすべき決心を先延ばしにして良いということではありません。なぜなら、そのような人には「主の日は盗人のようにやって来」るからです。「その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしま」うことでしょう。

【水曜日　だから何なの？】

「このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。3:12 神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。 3:13 しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです」第二ペテロ3:11～13

キリストのご再臨について、自分とは何の関係もない出来事のように思ってはなりません。主のご再臨の事実は信じる者たちに生活の変化を促すものです。ペテロはここでいくつかの私たちがすべき3つのことについて語っています。

①聖なる信心深い生活を送ること　②神の日の来るのを待ち望むこと　③再臨を早めること

主のご再臨に対して、自分自身に対しては主を待ち望みつつ聖なる信心深い生活を送ることが求められています。

つまり、主がご再臨を望むことによっては、わたしたちの生活はより一層聖なるものへと変えられているということです。また、他者に対しては再臨を早めるようにと言われています。主のご再臨をどのようして早めることができるのでしょうか。それは神様が一人も滅びることを望んでおられないわけですから、一人でも多くの人に福音を述べ伝え滅びから免れるようにすることが再臨を早めることになります。

【木曜日　最後の訴え】

ペテロはこの手紙を閉じるにあたり、最後の訴えをしています。それが3章14節以降の「だから～」と続く言葉です。

「だから愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい。また、わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい…不道徳な者たちにそそのかされて、堅固な足場を失わないように注意しなさい。わたしたちの主、救い主イエス・キリストの恵みと知識において、成長しなさい…」第二ペテロ3:14、15～18

これまでのことを繰り返しています。聖なる生活を送ること、主の忍耐深さと救いを考えること、そして間違った教えに騙されないこと、そして神の子として成長することなどです。惰眠をむさぼるような生活をしているのはクリスチャンにはふさわしくないということがひしひしと伝わってきます。焦る必要はありませんが、一歩一歩確実に主にあって成長していきたいものです。